

## 渡辺太郎『国際貿易と経済発展』

小島清

(一橋大助教 読)

本書はまさにわれわれ国際経済理論学界が翻期的労作であろうと久しく待望していたものである。安井琢磨博士の高弟として理論的透明さにおいて、つとに令名高き大阪大学教授渡辺太郎氏が、十数年来の構想と蘊蓄をかたむけて世に問われた処女作であるからであり、加うるに書名『国際貿易と経済発展』が暗示しているように、究明されている問題がいかに魅力的であるとともに、重要であるからである。

著書自らはその序文において、「国際経済理論の基礎を説明」する第一―三章と、「世界の数多くの国々、とくに日本を先頭とするアジアの諸国、が今日直面している一連の諸

困難を取り扱っている」第四―八章との二部に大別されるのであるが、わたくしは、むしろ(a)ケインズの国際経済理論の直接的適用である第一―五章と、(b)表題を逆にした「経済発展と国際貿易」という課題を取扱った新しい展開に属する第六―八章との二部に分けて吟味させて頂くことにする。

「本書は理論的であって、実証的ではない」とい、「近代経済理論、とくにケインズ経済学、の基礎知識さえあれば、容易に理解できる」と序文で述べられていることからわかるように、本書の基本的立脚点はケインズ経済学である。このケインズ経済学が、右に大別した前篇において、国際経済の基礎理論としてどれだけ精緻に展開されているか、またそれが後篇の経済発展というかなり質的に異なるむつかしい問題についていかに巧みに成功的に活用されているか、この二点を評価することをこの書評のねらいとしたい。

かつて赤松要博士に与えられた渡辺教授の批判(渡辺太郎、資本不足国における輸入の役割、『理論経済学』一九五三・五)などから推測するに、著者はかなりはげしい性格の持主であると思われる。その著者の逆鱗にふれることを甚だ恐怖するものであるが、著者の論理の重点を跡づけてみるとともに、わたくしの懐いている若干の問題をあえて披瀝して、後輩の一人として渡辺教授の高教に接したいものと希望にたえない。

## 二

わたくしが前篇として区切ったものは、第一章 国民所得と貿易量、第二章 国際投資第三章 景気変動と国際貿易第四、五章 国際収支の調整という問題を含む部分である。この五つの章を通ずる中心課題は、第一章に展開された外国貿易乗数―これを以下でモデルαと呼ぼう―と、第五章の三で為替切下げの直接効果として展開された価格効果―モデル

ル $\beta$ —との二つの分析武器を活用して、国際投資の効果、国際的局面をも含めた景気変動の全過程の完璧な解明、国際収支調整の諸方策——補整的金融（バットー政策）、デフレ政策、為替切下げ、直接統制など——の効果の比較検討を企図されているのである。したがって分析武器となるモデル $\alpha$ と $\beta$ ——それが著者のいうケインズ経済学であろう——の周到にして完璧な展開は何にもまして重要であるといわねばならない。ところがわたくしにはこの基礎構築自体が不完全であるように思われる——おそらく著者は、一般読者を困惑させないために複雑な展開をわざと省略されたのであろうけれども。

まずモデル $\alpha$ すなわち外国貿易乗数の展開についてみよう。その核心は資本財の国内生産、すなわち投資の増加( $I_a$ )と輸出の増加( $X$ )とは等しく国民所得を乗数倍だけ増加させる基礎となるが、貿易収支に対しては違った効果をもつ。すなわち(a)投資の増加は、 $—m_1 I_a$ だけ貿易収支を悪化するが、(b)輸出の増加は $m_2 X$ だけ改善するというアシンメトリーがある(ただし $m$ は限界

輸入性向、 $s$ は限界貯蓄性向である)。このアシンメトリーは外国反作用を考慮した場合においても本質的に異なることが証明されている(二五頁)。さらに明言されていないが、独立投資のほかに誘発投資( $i$ )が考慮にいれられた場合でも、安定条件(六、八七)をみたしている限り、右のアシンメトリーは妥当する(八七頁)。こういうアシンメトリーが著者の分析の基本武器である。

このモデル $\alpha$ の展開について若干の疑問がもたれる。第一に、著者は慎重に資本財輸入( $I_m$ )と消費財の輸入( $C_m$ )とを区別し、四頁の(4)式  $S = (I_a + I_m) + (X - M)$  をたてるのであるが残念ながら、その後の乗数展開には $I_m$ が組み入れられていない。(ついでに細い点であるが、(4)式について「貯蓄が国内投資と貿易差額〔輸出と輸入との差額〕との和に等しくなければならない」(頁一四)といっているが、少くとも形の上では(4)式には $I_m$ が入っていて、そうはならない。もう少し初心者にもわかるような親切な説明が加えられるべきではあるまいか。こういう親切さの必要は、(7)式(頁一六)や(9)式(頁一七)導き方について

も、誘発投資性向 $i$ を含むときにも依然として  $C + m_2 s I$  (頁一六) となるのか、などについても痛感する) わたくしにとっては輸入資本財を組入れた完璧な乗数モデルをこそ数学的にエレガントな渡辺教授に期待していたのである。乗数式に限らず輸入食糧、原料、資本設備を本格的に理論モデルに組入れることこそ今日の重要課題の一つといわねばならない。産業連関論の活用も必要であろうし立地論をも編入することが不可欠であろう。そういう本格的基礎構築を果すことなく、著者は「輸入の役割に対する反省」という第一章の結びにおいて、戦後経済復興において果した輸入の役割が、ケインズ的な「所得の漏れ」としてのマイナスではなく、国内で不足している資本財の輸入は生産を刺激するプラスの効果をもつことに着目する。つまりケインズ理論に代り古典派理論が復位すること(頁三四)をたんに経済の状況のちがいに帰するのである。それは正しいことではあろうが、古典派理論が妥当する経済状況においてはいかなる乗数式が成立するのか。なぜケインズ理論と古典派理論との両者を説明できる乗数式をう

## Book Review

ちたてないのか。そのなかのどのパラメータ  
 1のいかなるちがいが二つの状況のちがいを  
 意味するかを追求しないのか。おそらくその  
 鍵が $I_m$ の正しい取扱ひ方にあるであろう。  
 著者は別の箇所(頁六四)で「理論化の試みは  
 ここで突然中止され、それに代つて、不完全  
 な骨格に肉づけを施す努力が始められる……  
 (それは) わたくしの理解に苦しむところであ  
 る」と既成景氣理論を高らかに批判してい  
 るが、同じ苦情をわたくしは著者の輸入資本  
 財の取扱ひについて投げかけた。しかも $I_m$   
 の取扱ひは、本書の全般に関連をもつ基本問題  
 なのである。

外国反作用を含む乗数の展開については、  
 そこでは独立変数は二国の投資変動だけであ  
 る筈であるのに「外国に対する輸出が独立に  
 $\Delta M'$ だけ増加した場合(頁二四)を考へているのは  
 どういうわけであろうか。(四)式において $\Delta M'$ は  
 外国の所得を減らさないものであろうか。もし  
 減らさないならば、そういう独立の変動はど  
 うしてひき起されるのであろうか。ここでも  
 わたくしはそのような安易な解明でなく、一  
 国の投資( $I_a$ )と外国の投資( $I_a'$ )との双方

が変動する場合の乗数式をなぜ完璧に展開さ  
 れなかったのか、甚だ理解に苦しむものであ  
 る。なぜならば、次に明らかにするように、  
 $I_a$ と $I_a'$ の大小が、この本の敘述の論理の中核  
 をなしているからである。

一例をあげよう。第三章において従来の景  
 氣理論がもつていた物理的な上昇限界のほか  
 に国際収支困難、対外支払準備危機という貨  
 幣的限界の存在を導きいれ、貨幣景氣理論の  
 復活(頁七五)を推論されることは著者の卓見で  
 あらう。その上昇限界の解明が七二―七三頁  
 にかけて与えられている。それは流麗な名文  
 のゆえにわかり易くみえるが、実に複雑であ  
 る。そこに表現された著者の企図と奥深い論  
 理とを果して、読者の何%が間違わずについ  
 ていけるのであろうか。もし、前述のようなモ  
 デルがはつきり構築されているならば、 $I_a$ と  
 $I_a'$ の差、乗数を構成する両国の係数の大小に  
 よつて、案外簡単、正確、明瞭に提示するこ  
 とができ読者にも親切であつたのではあるま  
 いか。モデル $\alpha$ および次に述べるモデル $\beta$ と  
 の複合が適用された箇所は、右のほかに、プー  
 ムの崩壊(頁七八―七九)、景氣の下降過程(頁八四―八五)、

金価格引上げ論に対する批判(頁五一)、為替切下  
 げのロビンソン理論への批判(頁四八―四九)、資本設  
 備の懷妊期間(頁二九)、生産性改善の効果(頁七六  
 および一九九)、輸出拡大の利益と条件(頁二二五、二二  
 二〇頁)、輸出拡大の利益と条件(頁二七、二八頁)  
 など数多くある。これらの箇所は著者が既述  
 の經濟理論に國際的局面向を追加した独自の貢  
 献部分であり、そういう部分で生き生きと働  
 き、唯一のきめ手となつてゐるのがモデル $\alpha$   
 と $\beta$ なのである。だから本書の特色は國際經  
 済上の多くの問題をケインズ經濟学によつて  
 有効需要の側面に強調をおいて結論づけたと  
 ころにある。いかえれば、いささかケイン  
 ズ的でありすぎるとみてよいかもしれない。

モデル $\beta$ の為替切下げの價格効果が輸出供  
 給弾力性が無限大である限界的ケースだけに  
 ついて展開されている(頁三三―三三頁)。それだけで  
 十分であるかどうかについて若干疑問なしと  
 しない。けだし例えはそのために著者が為替  
 切下げは交易条件を悪化する(各所)と思ひこ  
 んでその後の分析を進めてゐるのではないか  
 と疑われるからである。その点は問われないが、  
 問題は所得効果と價格効果の綜合について  
 である。「所得効果は為替切下げが貿易差額

に与える効果の方向を変えない」とするロビンソンの立場を著者は批判している(一四七頁以下)。

たしかにロビンソンにも曖昧な点がある。著者が一四八頁であげている輸出入額が同じ額だけ増加したケースは為替切下げの価格効果がゼロであるから、輸出増にもなう所得効果的輸入増を考慮すれば貿易差額がマイナスになるのは当然であろう。価格効果が輸出増、輸入減をもたらす通常の場合の所得効果についての著者の解答(一五〇頁)は一義的でない。所得効果のゆえに貿易差額の方向が逆転することさえ指摘している。だがこういう点を徹底的に究明されることこそ理論家たる著者にもっとも期待するところである。著者はモデル $\alpha$ において、輸出増の所得効果がどれだけ貿易差額を必ず改善するかを明示された(一七頁(9)式、二四頁(20)式)。そうであればそれに価格効果による輸入減少額を加えたものが総合効果になり、それは必ず貿易差額を改善する筈である。差額の方向が逆転するのは $\alpha$ あるいは $\beta$ のごとき不安定な場合に限られる(諸性向が変る場合は別である)のではあるまいか。

## 三

後篇は書名にふさわしく、第六章 技術の進歩と国際貿易、第七章 過剰人口と国際貿易、第八章 経済発展と国際貿易の三章から成っている。統一課題はむしろ、「資本蓄積と国際貿易」とみたほうがよい。ただし「過剰人口は要するに資本の問題である……貿易と過剰人口との関連は当然資本蓄積の問題を中に通して考察されなければならない」(三三三)

というのが著者の基本的立場であるからである。後編で追加された理論武器は、労働生産性と商品コストは一人当り資本量、したがって資本蓄積の函数であるということである。技術進歩は本来別のものであるが資本蓄積とほとんど等置されている。経済発展という長期の問題を取扱うにはそういう生産函数論が根本であることは当然であるが、生産函数の詳細な取扱ひ、資本蓄積のスピードの相違に基づく諸国の経済発展のシーソー・ゲームと国際分業の動態に関する基本的展開は十分とは言えない。むしろすでに触れたように資本設備の懐妊期間、操業期間、過剰人口から

の脱出路、農業国対工業国ないし後進国対先進国の利害対立、低開発国の工業化が先進国に与える影響というようないくつかの興味ある局面について分析がほどこされ、きめ手として既述のモデル $\alpha$ と $\beta$ が活用されているのである。

著者の定義(三二)に従って、所与の資本量で活動される労働が適度人口ということであれば、日本でもインドネシアでもより労働集約的な低い技術を採用しさえすればいつも適度人口になり、理論的には過剰人口は存在しないことになりはしまいか。逆に生活水準の高いアメリカでも過剰人口国たりうることになる。過剰人口の解決路は、結局「強制貯蓄(課税と信用創造)による資本の蓄積と、それを円滑化するための外国貿易の伸張」(三三三)であるとみる。外国貿易の拡大が資本蓄積に役立つかということは究明を要する重大問題である。この点だけを吟味してみよう。

三段論法形式でいうならば著者は次のようにいう。(正)輸出の増加は交易条件の有利化を通じて、実質所得水準を高め、資本蓄積を促進する(三三三頁)。(反)「過剰人口国が外国

の競争を排して世界貿易量のより大きな分け前を占めうるためには、取引国に対して競争国よりも有利な条件を提示しなければならぬ。……それは供給価格の引下げ、そしてそれだけである。換言すると、交易条件の不利益が絶対に必要なのである。(八二頁) 一体これからいかなる(合)が結論できるのであろうか。

外国貿易の拡大という最初の課題がいつの間にか輸出だけの拡大ということにすりかえられている。輸出増が交易条件を不利化するときめこむならば、逆に輸入の増加は交易条件をどう変えるのか。著者とは反対に貿易の利益は輸入が国内で生産するよりも低廉になるといふ輸入側にこそあるとの考え方さえある。要するに輸出と輸入を綜合した国際分業ないし貿易の利益こそが資本蓄積と経済発展につけ加わりそれを促進するものであろう。そういう貿易利益と貿易による市場拡大に伴う大規模生産の利益という基本的要因から「経済発展における貿易の役割」という重大課題に接近するほうが古くさいけれども、依然として望ましいのではあるまいか。

このほかに「輸出産業における技術の進歩は国際収支に関する限り、不利な効果を与えない」(七九頁)とあるが三国モデルにしたらこの結論は修正されはしまいかとか、「所得の分配と国際貿易」(三〇頁)という問題をもっとつきつめてほしいとか、低開発国の工業化は、先進国全体としてみると、後者にとって利益が不利益を圧倒する(二六頁)という重大な結論について、たんにそういう「傾向がある」というのでなく、なぜそういうものかの理論的証明がほしいなどの疑問と不満とをいじかざるをえない。

#### 四

この短い書評では意をつくさない点が多いし、わたくしの疑問の多くは誤謬か不十分な理解かに基づくであらう。したがってわたくしの批判はいささかも本書の香り高き価値を損うものではない。本書に取上げられている問題の配列は、近代国際経済学の中核を衝き、綺麗なバランスと膨の深いシルエットをたたえている。正確なる定義からはじまり厳密な仮定のうえに一つ一つ理論をつみ上げられる

著者の行きかたは、あくまで手がたく着実であり、論理はあくまでも均斉を保ち透明である。ことに一般経済理論を心にくきまでに消化して、そのうえに、またそのなかに、国際的的局面を延長し融合された手腕は見事であり、その貢献は高く評価されるべきである。まことに本書はわが国際経済学の水準を格段と高からしめた金字塔である。同学の後輩として斯学の発展のために渡辺教授の高教を乞うとともに、教授が実証研究や実際界との接触をもさかんにされて、その理論的透明さを一そうとぎすまし、活用されんことを冀求するものである。(創文社、現代経済学叢書、二六六頁、三九〇円)